

# フィリピン・マニラ日本人学校

前 マニラ日本人学校

現 北見市立小泉中学校 教諭 橋本正之

はじめに

平成 16 年度から 3 年間、在外教育施設派遣教員としてマニラ日本人学校に勤務した。平成 16 年 4 月 6 日、「真夏」のマニラ(ニノイアキノ・インターナショナル空港)に降り立ったときに「この暑さの中では生活できない」と思ったことが、昨日のこのように思い出される。

教育実践も生活もやることなすことすべて初体験で、目の回るような 1 年目。「仕事」が割り当てられ忙しいけど先を見通しながら勤務できる 2 年目。「あと 1 年かあ」と名残惜しく感じながらも相変わらず仕事は忙しかった 3 年目。どれも派遣前に聞いていた通りのあっという間の 3 年間であった。

多くの方々にお世話になり貴重な経験を積ませて頂いたことに感謝するとともに、その経験を少しでも「還元」できればと思い、いたって簡単ではあるが報告としたい。



## 1 派遣地について

### (1) フィリピン共和国

ルソン島やミンダナオ島を中心に、7000 余りの島々から構成された国で、マレー系の民族が多く住む。過去の歴史もあり、日本人や中国人、ア

メリカ人、スペイン人の混血の人々も少なくない。宗教は、ローマ・カトリックが 80% を超え、どの町にも教会が多くある。国語はタガログ(フィリピン)語、公用語はタガログ語と英語であるが、母語はもともと 100 以上あり、統一されていないのが現状である。気候は亜熱帯で、四季はなく



「乾季」と「雨季」の二季に分かれている。メトロマニラでは年間の最低気温でも 25 前後とかなり暑い気候である。治安は、モロ・イスラム解放戦線やアブ・サヤフ・グループなどの反政府組織が武力行使し、国内でも爆発や誘拐などがたびたびある。

### (2) メトロマニラ

マニラ日本人学校は、ルソン島にあるフィリピンの首都メトロマニラにある。メトロマニラはマニラ市やマカティ市などいくつかの市が集まって成り立ち、1000 万人程度の人口がいるといわれている。その中で、マニラ日本人学校は、タギグ市にあり、隣接してインターナショナル校やブリティッシュ・マニラ校などがあり、ちょっとした「学園都市」のようである。

首都だけに、オフィスビルやホテルが立ち並び、近代化が進んでいる。フィリピンの企業はもちろんのこと、日本や海外の企業も多い。しかし、慢性的な交通渋滞、政情不安から来る治安問題、大気汚染など、生活する上での問題は少なくない。

## 2 マニラ日本人学校について

### (1) 概要

小学部(400名弱)と中学部(100名弱)からなる小中併置校である。マニラにおける主な日本企業(富士通・トヨタ・丸紅など)の役員から構成される理事会が運営している「私立」である。普段は、児童生徒や保護者たちからは「MJS」(Manila Japanese school の略)と呼ばれている。



入学および通学資格は「日本国籍を有する子」であり、児童生徒は全員日本人であるが、そのうち20%を超える児童生徒はMH児(父-日本人、母-フィリピン人)である。MH児の中には、家庭環境から日本語の習得が困難な児童も少なくない。そのため、小学部低学年のMH児を対象にして、放課後日本語教室を開設し、日本語習得に力を入れている。

教育課程は日本と同じであり、昨年の年間授業日数は200日あまり、年間授業時数は中学部で1060時間あまりである。

始業式は4月上旬に行われ、7月末までが1学期。2学期は9月から12月下旬までであり、3学期は1月5日頃から3月中旬までであり、日本の祝祭日はほとんどない代わりに、現地の祝祭日で休校することがある。

### (2) 教職員

23名の文科省派遣と2名の財団派遣、現地採用日本人教員2名、英会話5名、水泳講師2名、事務室や保健室などに現地採用の職員が10名ほどの総勢40名を超えるスタッフがいる。

上記スタッフの他には、24時間体制で校地を守ってくれる「ガードマン」、校地内の花壇や植物たちの管理をしてくれる「ガーデナー」の人たちがいる。日本と違い、治安の問題は重要で、多くの現地労働者によって支えられてマニラ日本人学校はそこにある。

### (3) 学校の特徴

小中学部ともに「英会話」を週2時間「特色の時間」として取り入れている。現地教員を英会話講師として採用し、学年単位を英語力に応じて5クラスにわけ「英会話」を行っている。現地に滞在している期間が長い児童生徒ほど英会話力が長けている傾向にあり、MH児にその傾向が強い。日ごろの生活から、英語を使うことが多いこともあり、児童生徒の英会話を身につけるスピードははやい。

また、1年を通じてできる「水泳」もマニラ日本人学校の「特色」と言えよう。年間35時間の水泳時間を設定しており、日本で泳げなかった児童生徒でも、数年後には1万メートル近く泳げるようになることもめずらしくない。毎年7月には、学校の屋外プールで水泳大会が行われる。



### (4) 主な学校行事

入学式および始業式・・・4月上旬

児童生徒の大幅な転出入と派遣教員の異動も

あり、新鮮な気持ちと身が引き締まる思いで新学期の始業式と入学式が行われる。フィリピンでは4月はまさに「真夏」。全校児童生徒の集う体育館では、エアコンの温度調節も間に合わず、汗をかきながらの儀式となる。

#### 1年生を迎える会・・・4月

4月に入学した小中学部1年生を歓迎する会を児童生徒会主催で行う。入場場面では、中1が小1と手をつないで入場するなど、ほのぼのとした雰囲気の中、進行される。MJSの行事や1年の流れを学年ごとに工夫して「出し物」として発表している。

#### 児童生徒総会・・・5月下旬

児童生徒会書記局と8つの委員会から提案された1年間の活動計画を小学5年～中学3年の児童生徒で審議する。生徒会選挙が5月の初旬に行われ、委員会が発足して間もなくして総会があるので、大変忙しい活動になるが、子ども達は主体的に取り組む。小学部1年～4年生にも、児童生徒会書記局が事前に教室を訪問し活動計画をわかりやすく伝え、質問や意見を受けるなど、児童生徒会全体のものとして総会を行っている。2月末には年間反省の児童生徒総会も行う。

#### 水泳大会・・・7月上旬

1年間を通して水泳に取り組んでいるだけに、水泳大会は大勢の保護者が来て盛り上がる。小学部は日を変えて低・中・高学年のブロックごとに、中学部は全体で大会を行う。小学部では、距離の異なる自由形・平泳ぎ・背泳ぎから個々に2種目を選びレースに参加する。最終種目のクラス対抗の自由形リレーは、泳者のみならず応援にも力が入る。

#### 現地校との交流・・・7月中旬

毎年7月には、現地の私立校と全校児童生徒で交流会を持つ。この現地校は、前校舎の近くにある学校で、当時から交流が続いている。

MJSでは、この交流会に向けて学年ごとに「日本古来の遊び」「日本の舞踊」など伝統文化を照会したり、ゲームを企画したりして、現地校に通



う子どもたちと交流している。休み時間には、一緒に遊んだり、「ミリエンダ」(フィリピンのおやつ時間)としてフィリピン伝統のお菓子をご馳走してくれたり、1日の日程を終えて閉会するときには、名残惜しい気持ちになる。

この交流のほかにも、隣接するブリティッシュスクールと学年ごとに「球技大会」を行うなど年間を通して、他校と交流会を持つ機会は少なくない。



#### MJS フェスティバル・・・10月上旬

毎年10月上旬の土曜日には、MJS フェスティバルを行っている。MJS フェスティバルとは、日本の学校でいう学芸会や文化祭であり、当日は学年ごとに演劇や合唱、器楽演奏等の発表をしたり、学部ごとに合唱や器楽演奏をしたりする。演劇では、「フィリピン」を題材にしたものや、楽器演奏では現地の楽器を使用したり、伝統文化を発表したりする学年も少なくない。



### 修学旅行・・・11月

小学部は6年、中学部は2年が修学旅行の対象となる。

小学部6年生はバスに乗り、2泊3日で同じルソン島にあるバギオ市に出かける。バギオ市は、戦前まで多くの日本人が暮らした地方都市で、移民した日本人が主要道路の建設を行うなど、かわりが深い。現地では、学校を訪問したり、日系の方たちと交流会を開いたりしている。

中学部2年生は、観光地としても有名なセブ島に出かける。こちらも、2泊3日で現地校を訪問したり、伝統文化に触れたりするなどして、現地理解を深めようと取り組んでいる。

### 中学部英語暗唱大会・・・12月中旬

中学部が行っている行事。各学年から選出された生徒が体育館で英語の暗唱を行う。フィリピンは英語が公用語となっているだけに、そこに長く住んでいる生徒は発音も素晴らしい。毎年ハイレベルな暗唱大会になっている。

### MJS 大運動会・・・1月下旬

乾季である1月下旬に、運動会を行っている。3学期は始業式(1月5日)直後から運動会にむけて2週間余りの日程で練習が始まる。30度を超える強い日差しの中にもかかわらず、児童生徒はグラウンドで練習を行う。マニラでは水道水は飲料不可のため、子ども達はいつもより多めに水筒の水を持参し、熱中症に気をつけながらの取り組みとなる。全校児童生徒を紅白に分け、徒競争から紅白リレーまで力の入った競技が続く。小学部の



表現活動ではフィリピンの伝統芸能をダンスにして発表する学年も毎年のようにある。

### 卒業式および修了式・・・3月中旬

厳かな雰囲気、小中学部合同の卒業式が行われる。また、次の日は終了式と帰国教員の離任式も行われる。最終登校日となるこの日は、多くの児童生徒が帰国したり、現地校に進学や転学したりするなど、「別れ」を強く感じる式となる。帰国教員にとっても「帰りにたくない」涙の一日となる。

## 3 MJSでの3年間

### (1)すべてが忙しくて目の回る1年目

4月にマニラに赴任したその日から忙しい毎日が始まった。日本でも、転勤をして職場が変わればそれなりに忙しくなるものだが、赴任当初のそれは比べものにならない。中学校教員であった私が、小学校理科専科として赴任したせいもあるが、学校での仕事の一つ一つ違う。一日の動きがわからない。家に帰っても「生活の立ち上げ」もある。そんなところからすべては始まった。

理科専科の最も基本となる教科経営では、四季



のない任地において季節を追っていく仕組みになっている小学校理科は、戸惑いの連続であった。例えば、日本の四季の話をして帰国したこともない児童も少なからずおり、全然わからないことも度々あった。実験道具も十分とはいえず、土日にはホームセンターに出かけ調達。薬品の購入は現地の薬品会社に直接注文。たどたどしい英会話で何とか購入する。現地校と交流を持つ際には、英語で事前打合せ。「英語が堪能であれば・・・」と

まだいくらかましかったと思うが、出国前に創造していた以上の忙しさ。日本では何でもないことが、場合によっては「ストレス」に感じることも少なくなかった1年目であった。

#### (2)忙しいけど自分で「歩き始めた」2年目

2年目になるとそれなりに仕事が回ってくる。したがって1年目も忙しかったが、2年目はもっと忙しくなった。しかし、1年目ほど「忙しく感じない」。おそらく、1年間勤務して、ペースがつかめたからであろう。

主として受け持った分掌は、生徒指導と児童生徒会であった。特に、児童生徒会は時間に追われながらも楽しい活動になった。始業式が始まってすぐの役員選挙と児童生徒総会。放課後に活動することができないMJSでは、昼休みが唯一の活動時間。子ども達も時間を上手に使うと日本と同じように運営できる場所は素晴らしい。それが終われば、全校児童生徒が一同に会して交流する「行事」の計画と運営。年齢の大きく異なる小学生



と中学生の500名近くがどうやったら楽しく交流できるのか、子ども達と随分と頭を悩ませながら取り組むことができた。夏休み明けには、マニラの社会問題にもなっている「ゴミ山」(通称：パ



ヤタス)で生活する子ども達との交流。日本がいかに「物資に恵まれた国」であるかを、痛感させられた。この他にも、行事が目白押し。友達と遊べる「貴重な時間」を我慢して、昼休みを児童生徒会活動に充てている書記局の子ども達には、感心させられる1年間となった。

#### (3)仕事も充実、「もう帰るのか」の3年目

残り1年となった3年目。4月から何となく「カウントダウン」が始まっているような気持ちであった。

仕事の方は、よくわかってきた分だけ、その先まで見通してできるようになってきた。「変えた方がいいこと」は「変えよう」と学校行事などを変革(そんな大げさなことではないが…)できないかを探る1年となった。日本の学校でも大なり小なり「変革」することは難しいものだが、1年ごとに職員の1/3が入れ替わる日本人学校では、それ以上に難しい。慎重に考えて「こと」をすすめる重要性を再確認させてもらった。

最後の一年間は、一つ行事が終わるたびに「さびしく」なった(実際には忙しくて感慨に浸っていることもなかったが)。日に日に、帰国日が迫ってくるような3年目であった。

#### 4 現地の学校の事情

派遣期間の3年間で、現地における学校の教育事情や私の指導教科でもある理科の教育課程等について調べてみた。実際に学校を訪問したり、教職員から話をうかがったりして、日本の教育との相違点について調査した。調査対象は公立・私立・インターナショナルの3校であり、必ずしもフィリピン国内の学校すべてに当てはまることではない。簡単ではあるが、以下のように調べたことを報告する。

##### (1)公立学校・・・訪問先:san Agustin school

全校児童生徒は4000名を越える大規模校である。しかし、学校施設は小さく特別教室もないことから、朝6時から夕方6時までの学年によって

登下校時間の異なる 3 交代制で子ども達は通学している。1 教室には 60 名を超える児童が在籍し、ノートを購入できない子も少なくない。教科書は、学校が貸し出す仕組みであり、3~5 年間にわたって「使いまわし」されている。一単位時間は 50 分で、理科の授業は毎日 1 コマあるが、理科室もなく実験道具もない中で、討論形式による授業が行われている。

## (2)私立学校・・・Colegio san Agustin

マニラでも有名私立校である。小学から大学までが同じ敷地に併置され、6300 名の児童生徒学生が通う。

公立学校とは異なり、高い授業料が必要となる。学校施設も日本の学校と遜色ないかそれ以上である。理科室も完備され、実験道具も豊富にある。全教科にわたって 1 単位時間は 40 分授業で、通学時間も日本と同じくらいである。登下校時には、ほぼ全児童生徒が車で送り迎えされている。

## (3)インターナショナルスクール・・・

### Brent international school

20 年ほど前、メトロマニラ郊外に滞在外国人のために教会によって創立された。通学する児童生徒数は 1000 名余りで、その国籍は 30 を超える。在籍比は、韓国 27%、フィリピン 22%、アメリカ 17%などである。ちなみに日本は 6%で、MJS からこの学校に転入または進学する児童生



徒も少なくない。私立校と同様に、授業料は高く、それだけに学校施設も完備されている。例えば理科室は、4 領域に分かれて設置されている。

年度の始まりは 8 月であり、翌年の 5 月に修了

する。授業の一単位時間は 85 分であり日本から見ると長く感じるが、指導教諭によると「しっかりと教科指導にあたることができる」と良好のようだ。

3 年間にわたり、3 つの異なる学校を視察することができたが、公立学校の教育事情は厳しい。教科書やノートもない子も多く、学校施設は普通教室のみ、しかも 3 交代による通学状況・・・日本は恵まれていると感じた訪問であった。

## 終わりに

ありきたりな言葉しか見つからないが、本当に貴重な経験をさせていただいた 3 年間であった。派遣にかかわって、多くの方々に助けられ、ご理解やご協力をいただき、感謝の気持ちでいっぱいである。この派遣で経験したことを「どのように子ども達に返していくのか」、今後の私の大きな課題である。

